分業の「利益」と「痛み」：
「制度」および「競争」の本質に関する一考察

第Ⅱ部：競争の本質と帰結

江　口　　潜

2011年６月
新潟産業大学経済学部紀要　第39号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.39　June　2011

分業の「利益」と「痛み」：「制度」および「競争」の本質に関する一考察

第Ⅱ部：競争の本質と帰結

Benefits and Pains of Specialization:
Part II. The Essencial Meaning and Cocequence of Competition

江　口　　潜
Sen EGUCHI

要旨

本稿は江口（2009）の続編として、分業に伴う「痛み」というものに焦点を当て、その痛みの正体と源、そしてそこに見えてくる「競争」の本質とその帰結について考察を行うものである。本稿では、①「分業」ということには利益（あるいは恩恵）もあるけれども、そこには避けがたい「痛み」があること、②その「痛み」は「分業を行おうとする社会にあっては必ず伴う痛み」であって、決して「市場制度の特有の痛み」ではないことを述べる。そしてその上で、③そしてそのような「分業を行う社会には不可避な痛み」を市場制度はどのようなルールで解決しているか、そして④そのルールのもとで生じる競争の性質とそれがもたらしている成果、を論じる。

1．第Ⅱ部へのイントロダクション

本稿の第Ⅰ部（江口（2009））では経済活動の本質を「分業（による生産）と再分配」と考え、そして社会制度とはそのような「分業と再分配」を遂行し、そこで得られるべき「分業の利益」という「果実」を結実させ、紡ぎ取るための合意されたルールと位置付け、そのうえで様々な社会制度のもとで達成される「果実（成果）の多寡」という観点から市場制度とそれ以外の制度を比較した。本稿はその続編として、分業に伴う「痛み」というものに焦点をあて、その「痛み」の正体、そしてそこに見えてくる「競争」の本質とその帰結について考察を行う。すなわち本稿では、①「分業」ということには利益（あるいは恩恵）もあるけれども、そこには避けがたい「痛み」があること、②その「痛み」は「分業を行おうとする社会にあっては必ず伴う痛み」であって、決して「市場制度の特有の痛み」ではないことを述べる。そしてその上で、③そしてそのような「分業を行う社会には不可避な痛み」を市場制度はどのようなルールで解決しているか、そして④そのルールのもとで生じる競争の性質とそれがもたらしている成果、を論じる。

「分業」に関しては、それこそアダム・スミスの「国富論」（Smith（1776））以来、これまでは「利益」ばかりが強調されてきた感がある。そして市場制度というのは、まさに「分業の利益」を

享受できているがゆえに素晴らしい社会制度なのだ、といった議論や認識もあるかも知れない。[1] しかしその一方で「分業」には「痛み」が伴う。それは分業しようとすると、人々が「やりたいと思う分業」についての希望に必ず重複が生じ、その結果、「やりたい分業をやれない人」が出てしまう、あるいは「人を押しのけないとやりたい分業に就けない」ということになってしまう、という「心の痛み」である。この「分業の痛み」を指摘したうえで本稿ではさらに、市場制度の社会ではそのような「痛み」の原因である「就きたい分業の希望の重複」をどのように解決しているか、という、市場制度に含まれている「重複の解決のためのルール」を明示的に述べ、さらにそこで生じる競争の性質とそのもたらしている帰結について論じる。[2]

また本稿では、そのような議論の中で「競争」というものについて、それは「(分業社会の中にいる構成員それぞれの）やりたい分業」が重複するところに生じる「私こそがその分業に就きたい」という意思と意思のぶつかり合いと、そのための自助努力であることを指摘する。そしてそのため「競争」というものは、いかなる経済制度の下であれ、分業ということを行う以上はそこで避け難い現象であることを論じる。[3]

以下、第２節は分業の「痛み」とその源、および「競争」というものの本質について論じる。そして第３節で、そのような「痛み」の源である「分業の希望の重複」が市場制度の社会ではどのように解決されているのか、すなわち市場制度に内包されている「痛み」の源の解決ルールを述べる。第４節では第３節で述べられた解決ルールのもと、そこで生起している競争（それは今日の市場制度の社会で企業どうしの間で日々繰り広げられている「競争」である）の性質と、そのような競争が私たちの社会にもたらしている「豊かさ」を述べる。第５節で（第Ⅱ部の）まとめが述べられる。

２．分業あるいは生産特化の「痛み」

２．１　分業の「痛み」

第１節で述べたように、分業には「痛み」が伴う。それは分業を行う社会で、構成員の間で「その分業に私も就きたい」という希望が、社会の必要とする数を超えて起きて来ることに伴って生じる。すなわち「分業の希望の重複」が人々の間で起きることが原因となって生じてくる。そしてその「痛み」には２種類のものがある。

1　そのような議論、すなわち「分業の利益が享受できるから、市場制度の社会は素晴らしい」とする議論は誤りである（なぜなら「分業の利益」は、市場制度の社会の「専売特許」ではなく、市場制度ではない経済体制の国などでも分業は行われ、その果実は享受されているから）ということは、江口（2009）でも指摘した（江口（2009）p. 7の4.1節)。実際、例えば「社会主義の国」など市場制度ではない国や社会でも「分業」は行われているということは十分認識されるべき事実である。

2　したがって本稿は、その第Ⅰ部が「分業の利益」という、いわば「陽」の部分にスポットライトを当てたのに対し、この第Ⅱ部が「分業の痛み」という、いわば「陰」の部分にスポットライトをあてるものである。そしてまた、そのこと（分業の「陽」と「陰」、その各々にスポットライトを当てていること）が、本稿を第Ⅰ部と第Ⅱ部という「２編」に分けた理由である。

3　市場で観察される企業どうしの競争の倫理的な面からみた善し悪しや、そもそも競争の意味や本質、といったことについてはフランク・ナイト（1923）やハイエク（1946）が有名である。本稿はフランク・ナイトやハイエクとは全く異なる観点から「競争」ということの本質（「競争とは」ということ）を論じる。

第１に、「分業の希望の重複」が生じると何らかのルールなどによりその解決をせざるを得なくなるが、するとそこには「私はそれを作る人になりたかったのに、成れなかった」という不本意を感じる人が出てこざるを得なくなる。この「不本意な人が必ず生まれる」ということが「分業」の持つ第１の「痛み」である。[4]

すると「希望が叶い、就きたい分業に就いた」という人も、実はそこでは「誰かを押しのけて初めて、自分が希望する分業の座に就くことができる」ことになる。すなわち分業社会においては、自分の希望を叶えるためには誰か人を押しのけざるを得ない。これも分業ということの持つ宿命であり、しかし同時に心に痛みを感じざるを得ない、つらい事である。これが第２の分業の「痛み」である。[5]

これら分業の「痛み」は「分業（と交換）」を通じて人々が集団としてよりよい生活をし、より恵まれた状態で日々を過ごしたいと願うならば、そこ（分業）に必ず伴って生じる「痛み」である。それは市場制度を含む、ありとあらゆる「分業を行う社会」において避けることのできない「分業の、痛み」であって、間違っても「市場社会に特有のもの」などではない。この「痛み」を感じないですむ分業社会はない。

２．２　競争の本質とコスト

ところで分業があるところ人々の間に「分業の希望の重複」が生まれてくると、そこには当然「私こそが、その分業に就きたい」という個人の意思と意思のぶつかり合いが生まれる。すると人々はそれ（分業の希望の重複）を解決すべく、何らかのルールを持ち込み、それに則った解決を図るであろう。[6]すると持ち込まれたルールの下、「自分の希望が叶えられたい」と願う個人の意思と意思のぶつかり合いと「自分がその分業の座に就きたい」という願いから来る「ルールの下での、分業の座を勝ち取ろうと自助努力しあう姿」が人々の間に現れてくる。それが「競争」である。「競争」は、分業が行われ、「就きたい分業の希望の重複」が生じる社会には、必ず生じてくる現象である。「競争なき分業社会」というものは無いのである。あるいは「競争社会でない分業社会」というものは、あり得ないのである。[7]

競争のコスト

競争は、上に述べたように個人が、お互いに自分が望む分業に就くべく行う自助行為合戦なのであり、それ自体、資源を投入しあいながら行われる行為である。したがってそれには「資源を投入

4　分業ということは「誰かが何かを作るなら、他の人は、同じものを作らなくてもよい（別のものを作るよう迫られる）」ということでもある。したがって分業社会では人々はお互いに「私がそれをやるから、あなたは別の何かをやって下さい」と言い合うことになるのである。

5　分業の痛みを「椅子取りゲーム」の例えを用いて述べるるならば、「全ての人が望む椅子には座れないという痛み（椅子に座れず不本意だという人が必ず出てくるという痛み）」と、「希望する椅子に座るためには、その椅子を必ず誰かと取り合って、押しのけなくてはならない、という痛み」である。

6　そこに導入されるルールとしては、「独裁」というルール、すなわち誰かが“俺が決める”と言い張り皆がそれに従う、ということも含まれる。

7　もし社会や集団が「競争」というものを排除したければ、その社会や集団は「分業」をやめるか、さもなければ社会の構成員に「就きたい分業」というものについて自由意思を持つことを許さない（そうすれば「競争」は起きようがない）かのいずれしかない。

して行われる」という意味でコストがかかっている。

また、競争は、人々に、まさに「(己のために) 努力して頑張る」という不効用を与える。すなわち（自己提供・自己消費している）労働のコストがかかる。

そしてこれらのコスト（資源を購入して投じる費用および労働コスト）は本人が自己負担をすることになる。

しかし、この、競争をしている本人によって自己負担されるコスト（自助行為のコスト）は、競争に身を投じている個人、すなわち分業の座に就きたいと願い、自分のために努力する個人にとっては大きなものではなく、少なくとも

「何かに成りたいけれど成れない、という第１の痛み」＞
「誰かを押しのけないと成れない、という第２の痛み」
＋「自助行為にかかるコスト」

が成り立つ程には小さい。実際、この不等号が成り立っていなくては、その人は競争に身を投じない（努力しない）であろう。[8]

競争の違いによるコストの違い

ところで上に述べたように「競争」とは「持ち込まれたルール」の下での、人々の、分業の座を勝ち取ろうと自助努力しあう行為である。したがって「競争」のスタイルは「持ち込まれたルール」によって全く変わってくる。例えば何らかの能力が高い人からその分業の座に就く権利を得られることにしよう、というルールが持ち込まれるとそこではそのような能力の蓄積の大きい人になろうと努力しあう（自助しあう）競争が生まれ、社会には「能力を蓄積しあった勝者と敗者」が多く輩出される。そうではなく、例えば抽選で当たった人からその分業の座に就く権利を与えられることにしよう、というルールが持ち込まれると今度は「くじ運」の高い人になろうと努力しあう（自助しあう）競争が生まれ、社会には「くじ運を高めあった勝者と敗者」が多く輩出されるであろう。このように競争は、「持ち込まれるルール」に応じて全く異なったスタイルが生まれ、そこで人々が行うことになる自助行為の内容も全く異なったものになってくる。そして人々が行う自助行為が異なると、当然、そこ（自助行為）に投じられる資源やコストの大きさ、さらにはそこで生まれてくる産物（能力を高め合った多くの人なのか、くじ運を高め合った多くの人なのか）も全く異なってくる。

さて、そうなってくると「良い社会」と「良くない社会」の違いというのは、（まがいなりにも

8　ところで「競争」というものは現代の社会では忌嫌われ、それは「好くないものである」とする風潮があるようである。そのような競争への嫌悪が生じる理由は、人は「競争」の中に「分業の痛み」を感じるからであろう。すなわち「競争」をすれば「不本意な人（敗者）」が生まれる。あるいは競争をすればその際「誰かを押しのける（傷つける）」ことになる。かくのごとく、競争という「自分がその分業に就きたい」という人々の気持ちのぶつかり合いの中に「分業の痛み」は顕在化してくるのであり、そのため、人は競争を「痛みを生む、むごいもの」と考えるのであろう。しかしその「痛み」は「分業の痛み」であり、分業社会には必ず伴う、避けがたい痛みである。そのことを理解することが本稿を理解するということでもある。

「競争のあるなし」にあるのではなく）どのような「分業の希望の重複」の解決ルールを持ち込んでいて、その結果どのようなスタイルの競争を人々の間にもたらしながら「分業の希望の重複」を裁き、そしてその後に来る「分業の利益」という果実を獲得しているかということにあることが分かる。すなわち「分業の希望の重複」の解決の仕方の良し悪し（解決ルールの良し悪し）という点にある、ということが分かる。そこで次の節では「分業の希望の重複」について、市場制度という社会制度はどのようなルールを「解消ルール（ケリのつけ方）」としており、そしてそこにはどのような競争が生じているのか、ということを明確に述べる。そしてそれが「分業の希望の重複」の解決方法として「非難されるべき制度」であるのかどうか、ということを論ずることにする。

３．市場制度に暗黙に組み込まれている「分業の希望の重複」の解消方法

３．１　市場制度の社会における「分業の希望の重複」の解決ルール

市場制度は「分業と交換」という人々の間の「大いなる協力」を進めていくための一つの制度であるが、そこには「分業の希望の重複」をいかに解決していくか、ということについてのルール（誰がどの分業につくかを決めるルール）も暗黙的に含まれている。それは、次の通りである。すなわち

⑴　何を作る人になろうとするかは自由（すなわち職業選択の自由がそこにはある）。

⑵　人に喜ばれるものを多く作れば作るほど、その人（生産者）は大きな購買力（大きな富）を得ることができ、その結果、その分業の座に残れる可能性が高くなる。一方、生産したものが社会からあまり喜ばれず、求められなかった人は、「別の分業」の道を新たに模索せざるをえなくなる。

⑶　何かを作るべく分業を担当する人として社会から選ばれたとしても、社会からさらに「そんなものはもう作る必要がない。この社会で作られる必要はほとんどない。」と宣告されると「別の分業の道に移って下さい」ということも生じ得る、

である。[9]

そして市場制度の社会では、そこに生きる人々は

・分業のメニュー（「どのような仕事があるか」ということ）

と、

・「自分はこれが得意だ」といったそれぞれの得意分野や能力、適性

を照らし合わせ

・本人の希望（私はこれになりたい）

を表明することになる。そしてその上で「重複」があった場合には

・重複する生産者どうしの間であれば、「優れたものを作る人」が消費者という社会のメンバー全員によって（その産出物を購入され）選ばれる（みんなが喜び、欲しがるものを作っている人か

9　ラーメン屋の場合でいうならば「①ラーメン屋を目指すかどうかは自由、②行列のできるラーメン屋さんから、ラーメン業界に残れる。閑古鳥の鳴くラーメン屋さんは他の分業に移ること（つまり廃業や転職）を迫られる、③ラーメン業界で成功しても、人々がラーメン離れを起こしたら、やはり廃業や転職を迫られる」ということになる。

ら優先的に残る権利を与えられる)、
というルールにより、そのような「分業の希望の重複」は振り分けられ、とりあえずそこで「解決」をする（ケリが付けられる）ことになる。[10]

３．２　市場制度の「分業の希望の重複」の解消の特徴

市場制度はこのように「分業の希望の重複」に対して「みんなに選ばれた人から（所得（あるいは富）を得ることを通じて）その生産者として残れる権利を得る」というルールを内に含む制度である。そしてそのルールは以下で述べる通り民主的であり、そして「最大多数の最大幸福」、あるいは「社会における合理的な資源配分」といった目的を追求する上で合理的である。

⑴　民主的であり、かつ「最大多数の最大幸福」に近づく制度である。

市場制度に内包されている「みんなに選ばれた人がその分業の担い手として残る（行列のできるラーメン屋さんから残る)。みんなに選ばれなかった人は、その分業を担う座からは追いやられ別の分業に移ることを迫られる。」というルールは「希望の重複」を解決しようとする上で、おそらく最も「民主的」な方法である。実際「みんなが長い行列を作ったラーメン屋さんから順番に、ラーメン作りの世界（ラーメン業界）に残れる」のであるから、そこでは「誰が残るか」を決めているのは「社会の構成員みんな」なのであり、したがってそれは民主的である。

またこの制度は「社会の多数の人が美味しいと思い、長い行列ができるようなラーメン屋さんから残り、多数の人が不味いと思い、食べたい気が湧いてこないと思うラーメンを作る人は他の分業に移ることが迫られる」という制度であり、「分業の座に誰が就くべきか」ということについて「社会の中の多数派の希望」が反映される制度である。したがってそれは、もし社会が「最大多数の最大幸福を目指すべき」であるとするならば、そのような目的を達成しようとする上で極めて合理的な「分業の希望の重複」の解消ルールであると言うことができるであろう。

⑵　社会の持てる資源をよりよく活用しようとする上で、合理的である。

「分業の希望の重複」を解決をしようとするにあたり、市場制度以外の方法として、例えば、「みんなで平等に、くじ引きをして決める」という方法が考えられるかもしれない。それは例えて言うならば、ラーメン屋になりたい、という人が社会に溢れたならば、ラーメン屋を開業できる免許を「くじ引き」で与える、という制度にしよう、ということになる。そのような制度は、その分業に就きたいと願う人にとってはある意味「平等」であるかも知れないが、最善の資源（例えば最善の人材）が「適材適所」に流れていくことを保障しない（おそらく妨げる）制度であることは明らかである。[11]その意味で合理的ではない制度であると考えられる。それに対して「行列のできるラー

10　あるいは例えば受験生どうしの間であれば、入学試験で学力の高い人から順に選抜される（例えば医者になり、世の中の人々の健康状態を良好にすることに貢献したいと願う多くの若者の中から、入学試験という学力試験の結果の好い順に医学部への入学の権利が与えられ、そこで選抜されなかった人々には別の分業の道を模索することが求められる）というルールにより、希望の重複はとりあえず「解決」をすることになる。

11　そこには「腕はよいけれど、くじで外れたから仕方ない、ラーメン屋になれない」という「第１の痛み」を感じる人と「腕は悪いが、くじに当たったから、腕のいい人を押しのけて『不味いラーメン』を売るラーメン屋になってしまった」という「第２の痛み」を感じる人が大量に生まれる社会が生まれることであろう。

メン屋から残る」という市場制度は、まさに「みんなに求められ、喜ばれるラーメンを作れる人材」から優先的にラーメン屋という分業を担う立場に（残りたければ）残れるという制度なのであり、それは人材（あるいは人的資本）という社会の生産要素を最大限活かそうとする上で合理的な制度である。

３．３　他の社会制度との比較

他の社会制度はどのように「分業の希望の重複」を解決しようとしているのであろうか。たとえば社会主義計画経済の社会というのは「政府の官僚が、誰がどの分業をすべきか、また、どれだけ作るべきか」を決める社会なのであろう。そこに、例えば「スーパーコンピューター」といった超高速情報処理技術が加われば、社会主義社会というのはうまくいくよういに思えるかもしれない。

しかし、仮に「官僚」が「分業の希望の重複」をきれいに裁いたとしても、そこには「成りたいものになれなかった」という「分業の第１の痛み」そして「私が成りたいものに（官僚から）指名されれば、他の人が指名されない」という「分業の第２の痛み」は伴う。またそこには「官僚に選んでもらおうとする競争（官僚から選んでもらうための努力合戦）」が生まれるであろう。

あるいはそのような社会では、例えばある日、どこかの子供が突然何かに目覚め（例えば芸術に目覚め）その道の専門家になりたい、という希望を突然抱いたとして、そのことが官僚に、本当に伝わり、実現するのであろうか。あるいは無事にそのような希望が官僚に伝わったとして、そこで官僚によって

- 「気持ちは分かるが、止めておけ」

と言われたとするならば、その瞬間にそのような希望は（無情にも）断たれることになるのであろうか。そしてそのことは、好ましいことなのか、そうでないのか。あるいはそれは誰かによって判断できるのか。あるいはそのような判断ができる官僚（といっても生身の人である）や、その意思決定を支えるスーパー情報伝達網（それは今日の情報伝達技術やスパコンの有する情報処理速度を数段上回る「夢の、情報技術」であるはずである）は、本当に「私たちのもの」としていつの日にか獲得できるのだろうか。あるいはそれは何時なのか。[12]そしてそのような社会が、上に述べた「職業選択の自由があって、誰もがなりたいものを目指すことが許され、そしてその上で、みんなから選ばれた人がその分業の担い手となる」という市場制度の社会、に比べ、優れているのであろうか。

４．市場制度の下での「競争」とその副産物

３節では分業の「痛み」の源である「人々の間での、やりたい分業の希望の重複」について、市

12　例えば今日の情報処理技術では、例えば「１つの台風の24時間後の位置」は、明確には計算できない。「台風一つの進路すら分からない」という中、果たして何十万人、何億人いる個人（国民）の「意思の赴くところ」と「個人の能力に関する情報（例えば私は昨日は１キロ走る時間について、自己ベストを記録した（それだけ体力が向上した）など）」を日々、情報収集し、その最善の可能性を提案し、個人に提供し続けられるような「官僚集団」が、いつかこの世に出現するのであろうか。そしてこれこそは、ハイエクが社会主義に関して抱いた疑問であろう（ハイエク（1945））。

場制度の社会は「みんなに選ばれた人から、その分業に残る」ということをその解決のための「(暗黙の）ルール」としていることを述べた。以下ではそのような「みんなに選ばれた人から残る」という制度のもとで生じる競争、すなわち市場での競争の性質と、その結果、そこで生成される「豊かさ」を述べる。

４．１　市場制度のもとでの競争の本質：対戦相手を倒す競争ではなく、消費者すなわち社会のみんなから選ばれようとする競争

まず、市場における生産者どうしの「競争」すなわち「分業の担い手として、残り続けよう」とする競争は、「格闘技の競技者がリングの上で相手を叩きのめそうとする戦い」ではない。すなわち、生産者同士がお互い、刃（やいば）を向け合って傷つけ合う、というタイプの競争（というか争い）ではない。そうではなく「消費者という存在、すなわち社会のみんなに選んでもらおう、選ばれようとする戦い（みんなに選ばれた人から、その道の分業の担い手として残り続ける可能性が高くなる)」である。「選ばれた人が、勝ち」という競争である。

それは「恋人」を巡る複数男性の「競争」のようなものである。男たちは殴り合って勝った人が恋人を獲得できる、というわけではない。「彼女の気を引いて、選ばれたら勝ち」という競争である。そして選ぶのは「彼女」であり、そしてここでいう「彼女」というのは「社会のみんな」である。それが市場制度のもとでの競争である。

４．２　創意工夫にエネルギーが向く競争

分業の座に「座りたい」あるいは「有り続けたい」と願う生産者が、消費者すなわち社会の構成員である皆（みんな）から自社の製品を選んでもらうためには

- よりよい（すなわち例えば「品質で優れている」、「新しい」、「値段が安い」など）モノを作るしかない。その結果、そこで生き残ろう（分業の座に残ろう）とする努力はそのような
- みんなに選んでもらえるよう、よりよいモノを作ろう、大勢の人に喜んでもらえ、受け入れられるモノを作ろう、

という方向に向くことになる。したがって自ずとそこで競争に参加している人々のエネルギーはそのような方向での創意工夫（みんなに喜んでもらって、みんなに選ばれようという方向での創意工夫）に向けられることになる。その結果、人々から受け入れられるべく、人々の生活を「より快適に、より便利に」するための、より新しい財やサービスが絶えず生み出され続け（すなわち提案され、生産され続け)、その社会に暮らす人々の生活はそのような財やサービスに厚く囲まれ、常により快適に、より便利になり続ける。すなわち新しい財やサービスが常に生み出され続け、そして経済成長を続けることになる。[13]

それに対し例えば「官僚」や「独裁者」の指示や指令、コントロールにより分業の希望の重複が

13 「経済成長」ということについても、その真の意味を十分に理解せぬまま「経済成長はよくないことである」といったことを主張する人も世の中には五万といる。しかしながら、経済成長を悪く言う人のなかで、例えば実際に「経済成長」を拒絶し、「経済成長をしてない世界」に移住したような人を、私は（少なくとも私の身近には）見たことがない。「経済成長」の意味と意義（「経済成長とはどういうことであり、なぜ経済成長すべきなのか」といったこと）については、例えば拙著（江口（2009)）に明確に述べられている。

解決される社会になると、そこで「分業の希望」が叶い、その座に残るためには、そのような「官僚」や「独裁者」に選ばれよう、選んでもらおう、とする競争が生じてくるであろう。そこでは分業の座に就きたい人々は、例えば

• ワイロを贈る

といったことにエネルギーを向け、その方向に鋭意努力するようになるであろう。

そのような方向にエネルギーが向けられるのと「人々から選ばれるよう、よりよいものをつくるよう、創意工夫する競争にエネルギーが向く」のとでは、どちらがよりよい社会であるか。それは言うまでもあるまい。

まとめるならば、市場制度は「分業の希望の重複」については、「みんなに選ばれた人からその分業の担い手として残る。そうでない人には別の分業に回ってもらうことを迫る」という制度である。そのため、そこで起きてくる競争は「人々から選ばれるようとする競争」であり、そのため「みんなに選ばれるよう、より良いものを作るよう、創意工夫する」という方向に競争者のエネルギーが向く。その結果、市場制度の社会には経済成長がもたらされ、そこに住む人々の「暮らしぶり」は向上し続けるのである。

5．結語にかえて

本稿は第Ⅰ部（江口（2009））の続編として、「分業の痛み」というものに焦点をあて、その「痛み」の正体と源、そこに見えてくる「競争」の本質とその帰結について考察を行った。すなわち本稿では、「分業」には「利益（あるいは恩恵）」もあるけれども、同時に分業には避けがたい「痛み」があることを指摘した。ただしその「痛み」は「分業の痛み」であって、決して「市場制度の痛み」ではないことを強調した。また、そしてそのような「分業を行う社会には不可避な痛み（避けられない痛み）」の源である「就きたい分業の希望の重複」ということについて、市場制度の社会は「みんなに選ばれた人から、その分業の座に残れる」というルールに基づいて解決をしていることを論じた。

本稿の議論が、市場制度という社会制度の素晴らしさというものについての、新たな評価の視点ないしは地平というものを提供できているとするならば、著者にとっては望外の喜びである。

第Ⅱ部の参考文献

アダム・スミス「国富論」1776年（山岡洋一訳「国富論」，日本経済新聞社2007年）

江口潜（2009）「世の中、こうなっているんだよ」自費出版

江口潜（2009），分業の「利益」と「痛み」:「制度」および「競争」の本質に関する一考察　第Ⅰ部：分業の利益と社会制度，新潟産業大学経済学部紀要第37号，pp. 1 －10.

Hayek（ハイエク）（1946），“The Meaning of Competition," The Stanford Little Lecture delivered at Princeton University on May 20, 1946, in “Individualism and Economic Order," Routledge & Kegan Paul Ltd., London 1949.（田中真晴，田中秀夫編訳「市場・知識・自由」ミネルヴァ書房1986年所収）

Hayek（ハイエク）（1945），“The Use of Knowledge in Society," The American Economic Review 35, No. 4, pp. 519 －30（田中真晴，田中秀夫編訳「市場・知識・自由」ミネルヴァ書房1986年所収）

Knight（フランク・ナイト），F. H.（1923），“The Ethics of Competition," The Quarterly Journal of Economics 37, pp. 579－624.（高哲男，黒木亮訳「競争の倫理　フランク・ナイト論文選」ミネルヴァ書房2009年所収）

Benefits and Pains of Specialization: Part II. The Essencial Meaning and Cocequence of Competition

Sen EGUCHI

2011年6月
新潟産業大学経済学部紀要　第39号別刷

BULLETIN OF NIIGATA SANGYO UNIVERSITY
FACULTY OF ECONOMICS

No.39　June　2011